



# 近代と文化に関する仮説的考察 : 比較文化研究への一視座として

木村, 幹

---

**(Citation)**

国際協力論集, 11(1):83-105

**(Issue Date)**

2003-09

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/00392442>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00392442>



# 近代と文化に関する仮説 的考察

## － 比較文化研究への一視座として

木村 幹\*

### 目次

はじめに

- 第1章 近代社会の国内的秩序
    - － 再びゲルナーをてがかりに
  - 第2章 近代社会の世界性
    - － 「ウェスタン・インパクト」から  
グローバリゼーションへ
  - 第3章 近代社会のイデオロギー状況
    - － 「標準」の欠如
  - 第4章 近代社会と「文化」
    - － 改革者の障壁
  - 第5章 変化すべきものとすべきでないもの
    - － 「適応のゲーム」の為の二つの象  
徴体系
  - 第6章 近代日本の「適応」と「逸脱」
    - － ウェスタン・インパクト期の成  
功と「日本的」システムへの固着
  - 第7章 韓国の「逸脱」と「適応」－「小国」  
意識と「韓国的」であること
- むすびにかえて － もう一步先に進む為に

グローバリゼーションの浸透、国民国家の退場、新たな「世界市民」の登場。偶然であるにせよそうでないにせよ、90年代、新たな世紀の到来を前にして、多くの人々がそれを口にした。大前提として存在したのは、何かしら今日までの世界を支えてきたものが壊れつつあるという認識であり、また、その向こうに新たな時代が見えているのだという、漠然たる意識であった。未だその正体さえ明らかではない新しい時代を前にして、人々はそれに期待し、或いは恐れおののいた。

1930年代に力を有した、「ポスト・モダン」－ もっとも、それは嘗て「近代の超克<sup>1</sup>」という名で呼ばれた－を巡る議論が、この時期再び脚光を浴びたのは、だからこそある程度当然のことであった。近代の向こうにある時代は何であり、また、何であるべきなのか。

今日の状況を見れば明らかのように、確かにそれはその本来の目的である筈の「超克後」の時代を提示することには、ほぼ失敗し、嘗てのような輝きを失いつつあるように見える。しかしながら、1930年代における議論とは明らかに異なることが一つあった。1930年代の「近代の超克」を巡る議論にピリオドを打ったもの。それは第二次大戦における、英米諸国、即ち、当時の人々が「古い」近代を代表すると看做した諸国の物理的勝利であった。それは同じく異なる方面からのアンチテーゼとして存在したソ連型社会主義が引き続く時代において、緩やかな敗北を喫することとなったことともあいまって、「古い」近代の意味

\* 神戸大学大学院国際協力研究科助教授

を再浮上させることとなった。80年代初頭における、サッチャリズムやレーガノミックス、或いは新自由主義の復活は、そのことを端的に物語っていた。

だからこそ、その直後の時代において「ポスト・モダン」論争が再び展開されたことには意味があった。「黄金の20年代」のアンチテーゼとして、ブロック経済と共に登場した「近代の超克」論が、現実の力の前に打ちのめされて行ったのは对象的に、グローバリゼーションという強力な味方をつけた80年代から90年代にかけての「ポスト・モダン」論<sup>2</sup>は、一つの重要な置き土産を残した。即ち、我々は今日、国民国家を代表とする近代を支えた様々な組織が嘗てのような力を持ちえぬことを「確信」し、深刻な環境問題の中で、市場をさえ信じられなくなっている。明らかなのは、再び、我々が何かが終わるつつあることを感じ、また、変わらねばならないことを理解しているということである。変わったのは現実以上に、私達の意識なのである。

終わりつつあるものが、「近代」という名で呼ばれるべきかどうかの回答は留保しておくことにしよう。ともあれ、本稿は以上のような問題関心を前提として、もう一度、近代という時代について考えていこうとするものである。近代はいかなる時代であり、私達はどのようにその時代を生き抜いてきたのか。その際に重要なのは、次の二つの点である。

第一は、近代における個々の国家と外部世界との関係である。今日、グローバリゼーションの中で、国家の地位は大きく揺らいでいる。

ならば嘗て、即ち、人々が近代を未だ信じていた時代には、両者の関係はいかなるものであり、国家や国民は近代にどのように対処してきたのか。

第二は、そのような近代において「文化」はどのような役割を果たしたのかである。ここで断っておかなければならないのは、ここにおける文化とは、例えば、マックス・ヴェーバー等が扱ったような、「伝統」としての文化ではないということである。様々な議論で様々に取り上げられる文化であるが、筆者がここで注目したいのは、例えば、クリフォード・ギアーツが扱うような「象徴の体系」としての文化<sup>3</sup>である。言い換えるなら、本稿における文化とは、人々が自らの外に存在する情報を解釈する為の「ソフトウェア」を意味している。だからこそ、その「ソフトウェア」がどのような構造を持ち、外界の情報を如何に消化し、我々を特定の行動に導くかところこそが、本稿における意味での文化を理解する上で重要である<sup>4</sup>。近代という時代において、ソフトウェアとしての文化はいかなる役割を果たし、また、果たさなければならなかったのか。これこそが、本稿における近代と文化に対する視点である。

本稿は以上のような問題意識を前提とした上で、進んで日韓両国を事例にとって具体的に検討する。焦点となるのは、両国そのものの比較というよりも、両国が共に、外部世界との関係において、成功と失敗を均しく経験している、ということである。即ち、日本においては、明治期における「成功した近代化」

と、昭和前期における「無謀な世界秩序への挑戦」、更に、昭和後期における「目覚しい経済発展」と、近年における「失われた10年」の経験が存在する。他方韓国には、植民地への転落に典型的に現れた19世紀の「失敗した西洋の衝撃への対応」と、解放以後における「目覚しい近代化」の二つの経験が存在する。両国において、それぞれの時期における対応を分けることとなった背景にはどのような原因があり、それはどのようにして両国の近代への対応を成功、或いは失敗へと導いて行ったのか。そして、そこから我々は近代という時代と、そこにおける文化の役割について、何を学び取ることができるのであろうか。

それでは早速本論に入ってゆくこととしよう。

## 第1章 近代の国内的秩序 - 再びゲルナーをてがかりに

ここで近代という時代を考える手がかりとして、アーネスト・ゲルナーの著作を利用してみることにしよう<sup>5</sup>。

周知のように、近代社会を位置づけるに当たり、ゲルナーがその特徴と看做したのは次の二つのことであった。第一は、それはが高度な流動性を有していることである。ゲルナーは言う。共にそれが高度な分業の上に成り立っている、という点においては、農業技術に基盤を置く前近代社会と、近代社会は実はそう大きく変わらない。両者が異なるのは、寧ろ、その複雑な分業の体系の中を、人々が移動可能か否か、ということである。前近代社会に

おいては、社会における個々人の役割は明確に規定されており、容易にある役割から他の役割に移動することはできない。それ故この社会において人々は、ある地域から他の地域へいう地理的な移動は勿論、ある階層から他の階層へと社会的に移動することも困難である。この社会において、多くの人々は、親から引き継いだ「家業」、或いは若い時期に徒弟的修行を積んで熟練を獲得した「ギルド的職業」に従事すること以外に選択肢を持たず、結果、一部の極めて国際的な有文字エリートを顕著な例外として、地理的にも自らの生まれ故郷とさほど離れていない地域でその生涯を終えることとなる。

これに対して近代社会において人々は容易にある役割から他の役割に移動することができる。この社会において人々がその成長の過程で見つける技術は、特定の家業や徒弟制度の中に限定されない「汎用性」をもつものである。そこでは最早「家業」は大きな意味を持たず、徒弟的修行のあり方さえ変化する事となる。即ちこの社会では、どんなに「親方」から高い評価を獲得した「弟子」であっても、一般的に認められている「標準的」なやり方で仕事を進めないのであれば、大きな障害に直面することになる。彼らは時には、「親方」になる為には国家試験に合格する必要がある、一定の「審査」を経なければその製品さえ世に出すことさえできない。

だからこそ逆にこの社会において、人々は、一旦「標準的」な技術を獲得し、「審査」をパスすることのできる製品を生み出せるよう

になれば、社会的・地理的双方の意味で社会の中を自由に行き来することができる。否、彼らの技術は時にそれより遥かに一般的な性格さえ有している。近代社会においては、ある企業において会計事務を担当する職員が翌日から営業を担当することは決して珍しいことではない。成功した石油会社の社長が、次に有力な政治家としてのポストを狙うこと、官僚として専門知識を獲得した者が次に大学教員の地位を狙うこと。それはこの社会では何ら不思議なことと看做されない。

その背景にあるのは、近代社会特有の文化的画一性である。これこそが近代社会の第二の特徴である。前近代社会においては、人々がその生活において使用する技術は多様である。例えばそれは、漁業に従事する猟師と教会の司祭の間でその職務を遂行する為の技術や知識が同じではない、という範囲に留まらない。同じ猟師であっても、徒弟関係を異にすれば必要であるとされる知識や「技術」が全く異なることは珍しくない。即ち、ある猟師は漁に出る前に神に祈り身を清めることが重要であり、船には神棚がなければならないと考えているかも知れない。しかし他の猟師はそのようなことは必要ではなく、神棚など船の重量を増し、遭難する可能性を増すだけだと考えるかもしれない。明らかなのは、両者が同じ船に乗って漁に出ることは不可能だ、ということである。

近代社会はそうではない。そこでは多くの場合、同じ職業を行うに当たって必要とされる知識は、個々人や或いは家業や徒弟関係によ

らず大きく類似している。だからこそ、この社会では一旦ある特定の職業に従事し、それなりの評判を得たものは比較的容易に、他の職場、更には地理的に離れたところへと移動することができる。

しかし、近代社会の文化的画一性はそのようなレベルにさえ留まらない。そこにおいては、生業を全く異にするもの、例えば、先に挙げた猟師と教会の司祭の間においてさえ、両者は自らの職業を遂行する為の知識を共有している。彼らは、猟師は自らの収穫物を運ぶ為、司祭は信徒達との交流を深める為、自動車を運転することが必要かも知れないし、その資産管理の手段としてコンピューターを使うかも知れない。何よりもこの社会で暮らしていく為には、「読み書きソロバン」に基礎を置く広範な知識が不可欠であり、両者は共に自らの若い貴重な時期を同じように学校に通いながら過ごしたであろう。彼らはそこで共通の知識と、朝9時に職場に赴き、少なくとも17時までは「働き」、週に一度は休日を取る、という共通の生活習慣をも身に着けた筈である。だからこそ、時には、猟師を辞めた者が信仰の道に入ること、或いは、司祭を辞めた者が生活の糧を得る為に猟師へと転業することは、この社会では決して珍しいことではない。それを可能とするのは、両者が共有する、「近代社会で生きていく為の基礎知識」、即ち「文化」であり、それなしに私たちはこの社会で生きてゆくことはできない。

流動性と画一性を有する近代社会。だからこそ、そこでは文化的に画一性を有するネー

ションが形成されることがある程度不可欠になる。このようなゲルナーの近代社会観の妥当性について議論することは、本稿においては重要ではない。寧ろ、ここで見落とされてはならないのは、この議論が基本的に近代社会におけるある特定の国の内部に向けられたものであり、それ故、近代社会のもう一つの特徴である「世界性」については詳しく議論していないことである。

それでは、我々はこのゲルナーの議論を手がかりとして、近代の「世界性」についてどのように考えればよいのであろうか。

## 第2章 近代社会の世界性 - 「ウェスタン・インパクト」からグローバリゼーションへ

近代社会とは流動的で画一的な社会である。だから人々はそこで生きてゆく為には、自らの住む社会を近代社会の要求に合致する形へと変えていく必要がある。そのモデルの一つが近代社会において突如、世界的なスタンダードとして登場した「国民国家」であり、人々はその中でネーションと言う名の集団を形成することを余儀なくされた。

しかしながら、そのような流動性と画一性を「強要」する近代社会の特質は、それだけに留まらない。否、それが重商主義時代の欧州における多元的競争の中から生まれてきた<sup>6</sup>、ことから明らかなように、それは当初から国際的な競争を視野に入れている。今日の近代社会とは欧州各国が自らの生き残りの為の試行錯誤の中から生み出して来たもの

であり、また各国が成功したライバルの経験の中から、その部分部分を継承して作り上げたものである。軍事的競争を基礎に置くこの時期の欧州においては、自らのシステムに拘って、より有効なシステムの採用を拒否することは、軍事的敗北と極端な場合には、国家の消滅という形での「競争のゲーム」からの退出を意味していた。だからこそ、彼らは次第によく似た社会へと、現実的、そして理念的にも到着することになる。

言うまでもなく、このような一定の標準を「強要」する近代社会の影響は、欧州のみに留まらなかった。否、「強要」の程度は欧州外においては、欧州内部においてよりも厳しいものがあった。近代化を成功裏に達成し、相対的に強大な軍事力と経済力を獲得した欧州列強は、19世紀に入るとその力を本格的に欧州外へと向けることになった。所謂「帝国主義」時代の到来である。ことここに至って、欧州外の各国にできることは、結局、次の三つの何れかに過ぎなかった。一つは、この脅威に既存の体制や文化を以って対抗することである。しかし、アヘン戦争における世界最大の人口大国・清の敗北に端的に現れたように、それが齎すのは、彼らの欧州列強への軍事的敗北と、その結果としての広義の植民地化であった。二つ目は、この状況に対して自らの力で直接対抗せず、融和政策と「遠交近攻」的な外交政策を以って列強を分断し、自国を取り巻く勢力均衡状態を演出して、独立を維持しようとするものであった<sup>7</sup>。しかし、それも例えば、アフリカ分割を巡るベルリン

会議に端的に現れているように、肝心の列強自身が相互に交渉し、「円滑な」植民地分割を図模するようになると、適切には機能しなくなることになる。

倫理的、道徳的妥当性を別にして言えば、結局、彼らに残されたのは第三の方法、即ち、強力な力を有する欧州列強に似せて自らを改造し、自ら自身が列強へとの上がることしかなかった。それは言い換えるなら、非欧州諸国が、本来欧州諸国のものであった「近代社会」のフォーマットを自ら受け入れ、自らの社会を近代社会へと改造することに他ならなかった。だからこそ、彼らにとっては、近代が本来如何なるものであるべきであり、その本質が何か、等ということはどうでもよかった。重要なのは、目の前にいる欧州諸国が強大であり、ともかくその力の秘訣を「盗み取る」ことであった。彼らにとっては、事実上、近代化と西洋化は同義であったのである。

厄介だったのは、非欧州諸国に対する近代社会の影響が、国境において管理できるようなものではなく、国境の外から非欧州諸国の内部へと直接的に作用した、ということである。この点についてはアーノルド・トインビーによる「文明の接触<sup>8</sup>」の説明が我々に重要な示唆を与えてくれる。各国が「盗み取る」ことを目指した欧州諸国の軍事的技術の導入には、その前提としての様々な「科学的」知識の習得が不可欠であった。「科学的」知識の習得には、それを支える「合理的」な思考の獲得が必要であり、それは結局、近代化を試みた体制そのものへの「合理的」懐疑をも

齎した。ロシアにおけるデカブリスト、明治国家の自由民権運動、オスマントルコの青年トルコ党。それは各国における経験からも明らかであった。

何れにせよ、重要なことは、その出発の当初から近代の到来とは「世界的」な現象であり、その影響は国境を越えて世界各地へと及んでいった、ということである<sup>9</sup>。その意味において、その規模と深度は別として、今日のグローバリゼーションもまた、典型的な近代の現象であったということができのかもしれない。

### 第3章 近代社会のイデオロギー状況 — 「標準」の欠如

ウェスタン・インパクト、「文明国」と「野蛮国」の区別、「新外交」の到来、ブロック経済、ケインズ主義、福祉国家、新自由主義。19世紀後半以降を考えただけでも、近代の世界においては様々な潮流や「流行」があった。それがどれだけ多様であったかは、例えば経済政策を巡る議論だけをとってみても明らかであろう。19世紀の自由放任主義は、世紀末恐慌を経て、国家の能動的役割を期待する開発主義を齎した。第一次大戦後の好況は自由放任主義の時代を再び到来させたものの、引き続き大恐慌以後の時代はケインズに代表される修正資本主義全盛の時代であった。冷戦後の西側諸国における福祉国家の行き詰まりは、1980年代における新自由主義の興隆を齎した。

本稿において重要なのは、一見強固に見え

る「近代社会」の枠組みが、実はそれ自身非常に流動的なものである、ということであろう。それは我々が生きている時代においてさえそうであった。1970年代には、まだ、社会主義的な議論が相当な影響力を有していた。1980年代は、新自由主義と「日本型システム」という性質を全く異にする二つのモデルが共に脚光を浴びた時代であった。1990年代に入ると国家の後退は一層顕著なものとなり、市場万能の時代が訪れたかに見えた。しかし、2000年代の今日、超大国の圧倒的な軍事力を背景に、再び軍事力と、それを背景にする社会改良主義が異なる方向から力を取り戻しつつあるように見える。

厄介なことは、にも拘わらず、近代社会における集団や個人は、このような近代社会の潮流の変化に逆らうことができない、ということであろう。ウェスタン・インパクトに逆らい植民地化されていった諸国から、「旧外交」に固執し全てを失った国々、更には「上からの発展」のモデルに拘り経済発展への機会を失った途上国に至るまで、新たな潮流への適応を怠り、重大な被害を受けた国々の例は枚挙に暇がない。

問題はにも拘らずこの世界に生きる集団や個人にとって、自分達が生きる時代において自らが従うべき次なる「標準」となる潮流が何かなのかさえ時に定かではないということである。だからこそ、この社会に生きる集団や個人は、急速に移り変わる潮流の中で、自らの従うべき「標準」を求めて途方にくれる。

このように、近代社会は私達が従うべき明

確な「標準」を持たない社会、そして「標準」そのものが容易に移り変わる社会でもある。このような近代社会の特質は、再びそれを前近代社会と比較した時に明確となろう。周知のように、前近代社会には現実世界から超越した「真理」が存在した<sup>10</sup>。その中心的役割を果たしたのは、言うまでもなく、宗教である。それ故前近代社会においては、多くの場合、「標準」となるべき社会のあるべき姿はこの「真理」の中で比較的明瞭に述べられており、少なくともそれは短期間には、容易に変化することがなかった。前近代の社会において、人々が与えられた「天職」にある程度満足していたのは、彼らがその「真理」を信じているからであると同時に、「真理」が社会のあるべき姿を安定的に示し、実際の社会も相対的に安定していたからであった。個々人の生活もその中で、精神的、物理的保障を与えられ、人々はそれに安住することができた。

しかし、近代社会にはそのような保障は最早存在しない。この社会においては、個々人もそして国家も、目まぐるしく変化する様々な潮流を懸命に追いかけて、これに適応すべく試行錯誤することを余儀なくされる。比喩的な表現が許されるならば、近代社会における理想的な個人とは、菩提樹の下に座り「瞑想する人」ではない。それは寧ろ、「走りながら考える人」であり、また、「とにかく走る人」なのである。

#### 第4章 近代社会と「文化」－改革者の障壁

これまで述べてきたことから明らかなことは次の三つであろう。一つは、近代社会とは、社会内における文化的画一性が要求される社会である、ということである。本稿ではそれをゲルナーの議論に沿って確認してきた。二つ目は、このようなある特定の社会における文化のあり方は、単にそれが画一的であればよい、というに留まらず、常に社会の外部からの影響に晒されている、ということである。言い換えるなら、この社会においては、外界と完全に遮断された、或いは外界と全く不適合な形で自らの文化を保持することはできない。最後に、にも拘わらず、この社会においては一定の従うべき文化的標準は存在せず、仮にそのように見えるものがあつたとしても、それは容易に変化する、ということである。

以上のように理解するなら、結局、近代社会において我々はただ外界の変化に柔軟、異なる言い方で言うなら主体性なしに対応し、要求されるままにただ身を任せるしかない、ということになるのかもしれない。しかしながら、具体的な事例を想起すれば明らかなように、この一見簡単に見える「状況に流される」こともまた、実はそれ程簡単なことではない。第一に、個人や社会が、「状況に流される」ためには、自らを大きく変革させなければならない。当然それは、様々な既得権益と対立することとなる。第二に、社会においてあるシステムが機能する為には、それを正統化するイデオロギーが必要である。それ故多くの効率的で成功したシステムはそれを支

える強力なイデオロギーを有している。言い換えるなら、このような既存のシステム－特に過去において成功したシステム－の変容を試みる為には、人々はまず、古いシステムを支える古いイデオロギーを打破することから始めなければならない。第三に、このようなイデオロギーは時にネーションのイデオロギーと強固に結びついて存在している。このような状況においては、たとえそれがシステムの部分的な変革であっても、あらゆる変革は恰もネーションそのものを否定するものであるかのように受け取られる。

こうして結局、改革者の試みは、最初に既得権益と衝突し、次に既得権益を正当化してきた様々なイデオロギーと衝突し、最後には、ネーション全体のイデオロギーとさえ衝突することになる。にも拘わらず、近代社会においては、集団や個人は「立ち止まる」ことは許されない。ある国のある人々が何らかの新たなシステムの導入に成功し、軍勢力や経済力の著しい向上に成功したならば、他の集団や個人はとにかくそれを研究し、新たな対応策を考えなければならない。それはどこまで走ってもゴールのない社会であり、人々は終わりも目的もないレースを走り続けることを強いられている<sup>11</sup>。

だからこそ近代社会において、集団や個人は「外界の変化に合わせて変化する」能力を有していなければならない。そしてこのような理解が正しいとするならば、近代社会において、集団や個人は次のような能力が必要であることになる。第一は、まずは外界の状況

から「危機」を早期に認識する能力である。しかし、様々な国や個人、更には企業の事例が示すように、実はそれはそれほど簡単ではない<sup>12</sup>。第二に、「危機」を認識した後に、実際に自己改革へと乗り出す能力を持たなければならない。アジア通貨危機における各国の対応の違い<sup>13</sup>に端的に現れたように、危機の認識は時に必ずしも改革へとつながらず、極端な場合には、先述の既存システムに付随するイデオロギーともあいまって、自らを変革させることよりも、外界へ敵意を向けることへとつながることさえある。第三に、個人や集団は、この改革を外界との接触を減少させ、その影響力を遮断しようとする方向ではなく、寧ろ、積極的に外界との接触を保ち、それとの密接な関係を持つ方向へと導く能力を持たなければならない。仮にこの改革によって、この集団や個人が外界から切り離されてしまうことになれば、それはこの社会が近代社会における「走りながら考える」ゲームから自ら自身を退出させてしまうことを意味している。このやり方では仮にそれにより一時的な安定が得られたとしても、長期的には大きな利益をつかむことは難しくなる。第四に、集団や個人は、このようなゲームを一度きりではなく、繰り返し成功裏にプレーする能力を持たなければならない。それ故、例えば、上述の試行錯誤において作り出された新たなシステムに過度に固着することは、次なる「潮流」に対応してこのシステムを変容させることを困難にすることになるかもしれない。重要なのはこのゲームが繰り返しゲームであ

る、ということであり、また、繰り返されなければならない、ということなのである。

## 第5章 変化するべきものとすべきでないもの — 「適応のゲーム」の為の二つの象徴体系

さて、このように考えた時、私達はここでこの「近代社会における適応のゲーム」を成功裏に遂行するには、個人や集団は次の二つのものを有していなければならない、ことに気づくことになる。即ち、近代社会の潮流変化により容易に変容するもの、と、変容を容易にする変わらない何ものか、の二つである。仮にある特定の社会の全てが、外界の変化にあわせて変化するのであれば、この社会はどこかで外界の変化に対する感受性を失い、一定のシステムへと固着することになる可能性がある。このような危険性を排除し、「近代社会における適応のゲーム」を成功裏に続ける為には、外界の変化に応じて変化する部分と同時に、その変化を支える、変化しない何ものかがあることが望ましい。

ここで重要になるのは、このプロセスがどのようにして展開されるか、ということであろう。重要になるのは、外界の状況をどのように「理解」或いは「認識」し、自らの変革へと繋げるかということである。ここには、二つのプロセスが存在する。一つ目のプロセスは、外界の状況とそれの中の自らの状況を認識するプロセスである。ここにおいては、当該集団や個人が外界についてどのような認識枠組みを有しているか、が鍵となる。そし

て、ほとんどの場合において、ここで集団や個人は「合理的」な判断を下すのに十分な情報を与えられてはいない。

このような状況に置かれた時、集団や個人が行うのは、次のことである。即ち、自らが利用可能な自他の過去の経験を総動員して、現在の状況と似たものを探し出し、現在の状況をそれに近いものとして仮定して単純化して認識することである。実際、それは特殊なことですらない。文化人類学による豊富で示唆に富む研究が示唆<sup>14</sup>するように、近代社会においてのみならず、ほとんどの社会のほとんどの事例において、人間は外界の情報を、その情報に見合った形で逐一合理的に認識し、判断を下している訳ではない。寧ろそこにおいて重要な役割を果たしているのは、彼ら、或いは彼らの社会の過去の経験と別ち難く結びついた、様々な象徴を介した単純化された認識方法<sup>15</sup>であり、またそれによるパターン化された行動様式である。だからこそ、人間が状況の変化に合致した形で行動し得るのは、この象徴を介した認識と、それを前提とする行動様式が、実際の外界のあり方と、偶然に適合している場合に限られることになる。言い換えるなら、ある集団や個人が有する認識の枠組みが、実際の外界の状況を理解するのに不適切なものであるならば、外界の状況がどうであれ、当該集団や個人の行動は、外界の状況から遊離したものとなることになる。

二つ目のプロセスは、前述のような外界と自己の状況の認識を前提として、新たなシステムを作り上げるプロセスである<sup>16</sup>。この

新たなシステムを作り上げるに当たっても象徴は一定の役割を果たすことになる。何故なら、この新たなシステムは、それが既存の社会に存在しない新たなものであるが故に、人々は一般にそれを警戒し、それ故適切に機能しない可能性がある。このような状態を改善する為には、最低限当該社会においてこの新たなシステムに、単なる「やむを得ざる選択」以上の積極的な意味を持たされることが望ましい。そしてこのような意味づけを行うに当たって、集団や個人が利用できるのは、既にその時点で存在する象徴の体系、もしくはその断片に過ぎない。言い換えるなら、このプロセスにおいて、集団や個人が既存の象徴の体系やその部分を動員して寄せ集め、この新たなシステムに積極的な意味を持たせることに成功するなら、この集団や個人が外界の変化に適合的に対応できる可能性が大きくなる。逆に、新たなシステムを構築するに当たって、当該社会に利用可能な象徴の体系が存在せず、或いはこの改革を試みる集団や個人がそれを見つけ出すことに失敗するなら、新たなシステムへの移行は困難なものとなろう。

それではこのような過程において、「危機」に直面した社会はどのような認識の枠組みや象徴の体系を予め有していることが望ましいのか。もちろん、その全てを明らかにすることは、筆者の能力を遥かに超えることであり、また、本稿のような小稿においては実際可能でも、必要でもなからう。しかしながら、ここまでの議論において明らかなことは、少なくとも、ある集団や個人がこの社会において

生き残ってゆこうとするならば、少なくとも次のことが望ましいということである。一つには、当該集団や個人は、状況の変化について、それに泰然としているよりは、神経質なくらいに敏感である方が望ましく、だからこそ彼らの認識の枠組みもそのような傾きを持っている方がよい。何故なら、この社会において「立ち止まること」ことは、多くの場合「落伍すること」を意味しているからである。だからこそ、ここにおける認識の枠組みは、外界の刺激をオブラートでくみあいまいなものとするよりは、寧ろ、刺激を増幅し、集団や個人を一定の行動へと駆り立てるものであることが望ましい。

第二に、にも拘らず、ここにおける当該個人や社会は、近代社会から脱落することは許されず、その為には常に適応の為の試行錯誤を行なえなければならない。その為には当該集団や個人は、外界の変化に対する自らの試行錯誤に、相当な成功の可能性があるとの確信を有することが望ましい。さもなければ彼らは或いは絶望の中に改革を断念し、この「近代社会における適応のゲーム」からの離脱を選択するかもしれない。

第三に、彼らのこのような能力は、彼らが最初の適応に成功した後も維持されなければならない。勿論、認識の為の象徴の体系、即ち文化、のある部分は外界の変化に合致した変革の為に、一旦分解され、変容される必要がある。この過程においては、古いシステムを支えてきた象徴の体系は一旦解体され、同時にその断片を利用して、新たなシ

テムを装う新たな象徴の体系が構築される。当然、その過程である象徴は意味を失い、また、他の象徴はそれまでは有さなかった新たな意味を獲得することになる。

にも拘わらず、このような過程により既存の象徴の体系が完全に変質し、全く新たなものへと変容されるなら、そのことは結果として、当該集団や個人が改革の開始の時点においては有していた外界の状況に対する感受性を失わしめる可能性がある。そこにおいて彼らが次なる外界の変化に対して、最初の変化の時と同様の「危機」意識を感じ、自己改革を遂行できるか否かは、全く不透明であり、極端な場合、彼らには「近代社会における適応のゲーム」を続けることが不可能になってしまうかもしれない。言い換えるなら、このゲームを続ける為には、集団や個人が自らの過去の成功に陶醉し、その結果として構築されたシステムや価値体系をどのような変動にも対応可能な「堅固な城郭」であると看做すことは望ましくない。彼らはどこまでも外界の変化に臆病であり続けなければならない、そのような彼らの「基本的性格」は維持されることが望ましい。

ここで難しいのは、実際にはある社会における象徴の体系は、それぞれが相互に関係を有しており、それ故、一部の変容は他に波及せざるを得ない。即ち、新たなシステムを正統化する新たな象徴の体系の出現は、当然のことながら、外界の変化の認識を司る象徴の体系にも影響を与えることになる。問題は、新たな社会システムの正統化の為の新たな

る象徴体系を構築しつつ、どのようにして、安定的で有効な外界の変化の認識を司る象徴の体系を獲得するか、ということであろう。

抽象的な議論はこのくらいにしておこう。ともあれ、そこには、当該集団や個人を、外界の状況に応じて改革へと導くセンサーとしての「象徴の体系<sup>17</sup>」と、センサーからの刺激により変化する、新たなシステムの正当化の為の素材として使われる「象徴の体系」がある、ということが必要だ。

それではこれらは実際にはどのようなものであろうか。次にその点について、日本と韓国の事例から簡単に見てみることにしよう。

#### 第6章 近代日本の「適応」と「逸脱」－ ウェスタン・インパクト期の成功と 「日本的」システムへの固着

それが「倫理的」「道徳的」に「正しかった」否かは別として、自らの設定した目的を達成したという意味において、ウェスタン・インパクト期の日本の対応が「成功」であったことに疑いを持つ人は少なからう。言うまでもなく、明治国家、或いはそれを率いた元勳達の最大の目的は、深刻な西洋列強の脅威の中、日本という国家の独立を維持することであり、またそれに必要な軍事的・経済的等々の「実力」を獲得することであった<sup>18</sup>。

これまで述べて来たような本稿の分析枠組みにしたがってその「成功」の過程を改めて叙述するならばそれは次のようなものになる。即ち、この過程において第一に重要なのは、

日本、或いは日本の知識人がこのウェスタン・インパクト期の状況の中から早期に「危機」を感受し、逸早く改革に取り組むことができた、ということである。この点を最もわかりやすく示すのは、アヘン戦争における清の敗北を、日本の知識人が、単なる中国の敗北と捉えず、日本自身に脅威を与えるものと看做すことができたということであろう。周知のように、ここにおいて重要であったことの一つは、この当時の日本が「武人国家」であり、それ故、その支配層である武士達が、アヘン戦争における清の敗戦を英清両国間における、軍事的格差を示すものであることを的確に理解し、自らもまた西洋列強との巨大な軍事的格差の下に置かれていることを「認識」できた、ということである。この一見当たり前に見えることの重要性は、この戦争の当事者であった清自身が、同じことを「認識」できなかったことと比べるなら明確になろう。即ち、清はこの戦争の敗北の原因を、彼我の間に決定的な格差があるからというよりは、寧ろ、戦争のマネジメントや個々の官僚の対応に問題があったからである考え、それ故、軍事的敗北はこの国をして西洋的な軍備増強への改革へと導かなかった<sup>19</sup>。清が本格的な洋務化に取り組むことになる為は、彼らが太平天国の乱を経て、第二次アヘン戦争にて首都北京を直接軍事的に占領されること、そして皇帝以下の支配層が西洋列強の軍事力を文字通り「実感」させられてからのことである。

何れにせよ、「武人国家」の中に生き、国家間関係をはじめとしてあらゆるものの根幹

には「軍事」があり、この軍事的優位或いは安定なしには、自らの安定はあり得ないとする武士達の世界観、言い換えるなら、全てを軍事的象徴を介して理解しようという彼らの認識方法は、ここにおいて彼らが早期に「危機」を認識するには適切なものであった。そして、彼らはここからこの危機感を前提して、新しい体制を作り上げてゆくことになる。ここにおいて天皇という、それまでの時代にはさほど重要性を持たなかった象徴が、伝統的な意味づけをベースにして、新たな積極的な意味づけを持たされたこと、そして、それが明治国家の国民国家形成をどれ程容易化したのか、については、これまで無数の研究があるところであり、ここで敢えて触れる必要はなからう。

しかしながら、明治国家のこのような外界への成功裏の適応のあり方は、同時にその後へと問題を投げかけることとなった。問題は、ここにおいて形成された新たなシステムとその意味づけの為に構築された新たな象徴システムが、結果として、日本、或いは日本人が以前には有していた外界の状況から「危機」を読み取る能力を失わしめた、ということであった。即ち、当初は外界の変化に対する便宜的な対応であった筈の明治国家の象徴システムは、その過剰な意味づけ故に、固着的なものとなり、容易に変化できないものとなってしまった。それを典型的に示すのが、例えば、所謂「国体」を巡る議論である。これらの議論における問題点は、この時点での日本人が自らの「国体」を、日本人であることの

アイデンティティと不可分なもの、更には単に日本人のアイデンティティにとって不可欠なものであるのみならず、近代を「超克」する、どのような外界の変化に晒されても揺らぐことのない「堅固な城郭」である、と看做されるようにさえなってしまうことである<sup>20</sup>。日本精神、日本的なもの、そして日本の使命。これらのスローガンが叫ばれた1930年代、日本が外界の変化から「危機」を読み取り、自らを変革することが不可能であったのは、ある意味で当然であったというべきかも知れない。

日本の経験において興味深いのは、実はその後もこの国が、自ら主体的に外界の変化から「危機」を感受し、積極的に自らを改革することがなかった、ということであろう。戦後改革は確かに、一面では戦前或いは戦中期に日本人自身により構想されたものが実現されたという側面があり、それ故その全てを占領軍による「押し付け」であったということではできないのかもしれない。しかしそのことと、果たして日本や日本のエリートが、第二次世界大戦による敗北に伴い、旧体制が「上から」否定されることなしに、自力でそれらの改革を実現できたのか、と云えば、それは甚だ疑わしいといわざるを得ない。言い換えるなら、戦後改革における「日本人の手による改革」は、象徴によって過度に意味づけられ、固着化してしまったシステムがその象徴の体系と共に強制的に解体されて、はじめて可能であったのであり、それ故戦後改革における日本人側の一定の役割を以って、ウェス

タン・インパクト期と同様に、日本や日本人が外界から「危機」を感受し、改革を行ったのだ、ということには無理がある。

ともあれこうして新たに作り上げられたシステムにも、新たな意味づけが行われなければならなかった。象徴天皇制は勿論、平和国家論<sup>21</sup>、「商人国家論<sup>22</sup>」等の議論は全てこの延長線上に位置づけることができる。興味深いのは、今日において再び、日本のシステムはまたもや固着化してしまったように見える、ということである。「押し付けられた憲法」はいつの間にか嘗ての欽定憲法と同じ長さの歴史を持つものとなり、その改正は容易に想像できないものとなっている。憲法が体现する戦後日本の様々な「建前」は、仮に憲法そのものが部分的に改定されても、触れることさえできないに違いない。80年代に「日本型システム」と呼ばれた、終身雇用・年功序列・企業組合等を内容とする日本における労使関係にまつわる慣行は、今尚、強力な象徴的力を有しており、少なくとも多くの人々ができるならこれを維持したいと考えている。

このような過程において重要なことは、日本人がこれらに対して、過度な意味づけを行った、ということであった。実際、明治の「国体」も戦後の「日本型システム」も、そして「平和憲法」も、システムの出発時においては、便宜的な対応の産物であり、文字通り理屈は後からついてきた。しかしながら、現在では「後からついてきた理屈」はシステムを過度に飾り付けている。そのよしあしはともかく、それにより、日本は自己改革の能力を

失ってしまった、のかもしれない。

## 第7章 韓国の「逸脱」と「適応」－「小国」意識と「韓国的」であること

日本の最大の失敗は、新たなシステムの構築に伴い、過剰な意味づけが行われ、その為に外界の変化から「危機」を読み取り、自らを改革する能力が失われたことにあった。それはより正確に言うなら、日本がこの新たな、そして本来便宜的に作り上げられたシステムを、ネーションの象徴で過度で飾り立て、それ故、外界の変革に応じて変わるべきシステムを自己の重要な一部分であるかのように錯覚したということであった。その意味において、天皇を中心とする「国体」なくして日本精神はない、という者と、世界唯一の被爆国である日本は平和憲法を守る世界的責務がある、と主張する者は実は同一の次元に属している。重要なのは、彼らが制度をネーションと一体視してしまっている、ということなのだ。

このような観点から見た時、韓国の経験は日本と全く異なる示唆を我々に与えている。まず、ウェスタン・インパクト期の韓国、より正確には朝鮮王朝の対応は、日本のそれとは対照的なものであった<sup>23</sup>。第一に、彼らはこの巨大な外界の変革から早期に「危機」を読み取ることができなかった。その原因として、彼らの利用できた情報の少なさや経路の不十分さと共に、清と同様、朝鮮王朝が「文人国家」であったことを挙げることは容易であるかもしれない。第二に、この王朝で

は「危機」が感受された後にも、積極的な自己改革は行われなかった。彼らは自分たちの能力を日本のそれに比べるなら遥かに小さなものであると考えており、それ故、西洋列強の脅威に対する直接的な軍事的対応は不可能だ、と考えた。このことは私たちに、「危機」の認識が自己改革へと結びつくには、その改革が成功することが「確信」されなければならない、ということを確認させてくれる。そして、朝鮮王朝をしてそのような「確信」を持つことを妨げたもの、それは即ち、中国との朝貢関係の中で培われた「小国意識」であった。彼らは国際関係を自らの道を軍事力や経済力で直接切り開くことのできる「大国」と、自力のみではそれが困難な「小国」に分けて理解するという認識方法を前近代から有しており、そこにおいて、「朝鮮」或いは「韓国」という象徴は「小国」の側に位置するものと見做されていた<sup>24</sup>。

韓国の経験が示唆的なのは、ウェスタン・インパクト期とは対照的に解放後、就中、1960年代以降の韓国がこの「近代社会における適応のゲーム」を成功裏に遂行することができた、ということである。背景の一つは、日本による植民地支配という苦い経験を経た韓国人が、近代社会で生き延びて行く為には、ともかく「走り続けなければならない」ことを認識したということである。しかしながら、本稿においてより重要なのは、このように順調に快走を続ける韓国が、少なくとも現在までの段階においては、日本において典型的に見られたような成功したシステムへの固着化

を見せていない、ということであろう。言うまでもなくその典型的な事例は、1997年のアジア通貨危機に際して、従来の政治経済システムをあっさりと捨て去った、ということである。

ここにおいて重要なことは、韓国においては、経済発展を齎し、或いは民主化の結果実現された制度が必ずしも「韓国的なもの」、より正確に言うなら、韓国人をして自己とそのシステムを同一視さしめるような、積極的な意味を持つ「韓国的なもの」としては認識されていなかったということであろう。確かに「日本型資本主義」に類似した「韓国的資本主義」の議論はあった。しかしながらこの国家の主導の下、資源を少数の財閥に傾斜的に配分して経済発展を実現するというシステムは、経済的成功とは裏腹に、政治的には腐敗の温床であると常に看做されており、それ故、最後まで人々がこれを熱狂的に支持することはなかった<sup>25</sup>。他方、今日の経済システムは、ある意味ではIMF改革により「押し付けられた」と言えなくもないものであり、それを「韓国的なもの」ということは難しい。

それは政治制度や憲法についても同様であった。「韓国型民主主義」という用語は、嘗て権威主義体制期の政権が、「西洋的民主主義」との対比で用いたものであり、それ故、韓国においては今日まで否定的な意味合いしか持たない言葉となっている。そのような「韓国型民主主義」を打倒して獲得された今日の民主主義とそれを支える憲法は、それ故、韓国

的なものというよりは、普遍的な民主主義の側に属するものと認識されており、それ故、ネーションのイデオロギーと固着化することの難しいものとなっている<sup>26</sup>。

重要なことは、韓国においては、これらの「成功したシステム」がそれ自身過度な意味づけをされず、それ故、容易に変容され得るものであり続けた、ということであろう。他方韓国は、依然、究極的には自国をアメリカや中国とは異なる「小国」であると認識し続けている。この結果、彼らは自らが外界から孤立して生きていくことは不可能だと考えている。この国の外界の変化への高い関心と、過敏とさえ言えるほどの高度な「危機」に対する感受性はここに由来している。言い換えるなら、この国においては、新しいシステムへの移行とその正統化の為の象徴的動員は、結果として、この国の外界の変化に対する適切な認識を突き崩すことがなかったということになる。

近年における日本の停滞と韓国の成功。それはある意味では、外界の変化に対応して形成される新たなシステムに対する、象徴作用の働きによって説明できるのかもしれない。

#### むすびにかえて — もう一步先に進む為に

ここまで述べてきたことをまとめてみよう。

本稿の目的は近代社会を、外界、就中、来たべき「国民国家」の枠組みの外側における変化と「国民国家」の側の対応、そしてそこにおける文化の役割について考察することであった。そこにおいては近代社会の特質は

次のように捉えられた。即ち、近代社会の特徴の一つはそれが高度な世界性を伴っていることであった。そこにおいては如何なる集団や個人と雖も自らの外部への扉を閉ざし、交渉を拒否することは困難であった。外部の影響は否応なしに、近代社会の中に生きる集団や個人を巻き込み、彼らに变革を迫ることとなる。第二は、その外界の実態は流動的であり、集団や個人が従うべき「標準」が極めて短期間のうちに激しく移り変わるということであった。だからこそ、近代社会への包摂は当該集団や個人にとって、近代社会との最初の出会いの段階において、彼らの变革を迫るだけではなく、否、彼らがそれに包摂されればされる程一層頻繁に彼らに变革を迫ることとなる。

だからこそ、近代社会に適応しようとする集団や個人はこのような外部状況の変化に応じて自らを適切に变革する能力を持たなければならなかった。文化、或いは象徴の体系はここにおいて二重の意味で重要な役割を果たすことになる。第一に、流動的な外部の状況に対して不確実な情報を下に対処しなければならないこの社会においては、当該集団や個人が、問題となる外部状況とそれの中の自分自身の存在を「認識」する際に、それをどのような象徴体系を通して理解するかが決定的な意味を持っていた。その意味で、ウェスタン・インパクト期の日本における、複雑な国際情勢を軍事的な部分を中心に理解しようとした事例は、乏しい外界に関する情報から当時の日本が置かれた「危機」の本質を適切に

読み取った成功的な事例であると言えよう。これに対して同じ時期の韓国の経験は、外部状況に対する認識と同様に、既存の象徴体系を通して行動の主体そのものがどのように認識されるかが特に当該国家への致命傷となることを示唆していた。

第二に象徴の体系が重要な役割を果たすのは、外界の変化に応じて作り出される新たなシステムに対して意味づけがなされる段階においてであった。ある集団や個人がこの新たなシステムに対して、如何なる意味づけをもたせることに失敗したならば、ここにおいて旧システムから新システムへの移行、更には、新システムものの円滑な作用さえ困難になるであろう。

しかしながら、第二次世界大戦後における日本と韓国の事例が示したのは、もう一つ重要なことがある、ということであった。即ち、如何なる時、如何なる形で新たなシステムへの意味づけがなされた場合、それは当該集団や個人が有する外界の変化に対する認識能力や、自己変革能力が損なうのか、ということであった。それは端的には、新たなシステムに主体のアイデンティティに直結するような意味づけが行われてしまった時更には、自らを生み出して来た筈の「近代」に最終解決を与えるもの、とされた時であった。

その意味において、近代以後に形成された多くのものに、「日本的」との修飾語が付けられ、しかもそれが「近代」に対するアンチテーゼとして積極的な意味を持つものとして語られる日本と、逆に、民主主義や経済発展

等、「近代」的価値の前に、「韓国的」との修飾語が付けられたものが寧ろ否定的に捉えられることの多かった韓国の状況は全く異なっている。

本稿においてもう一つ重要なことは、我々は我々の生きる「近代社会」の中で「文化」を扱う場合、冒頭に触れたマックス・ヴェーバー的な形 - 即ち、文化を、「儒教」や「日本」等の宗教や地理的名称を付して扱う - のではなく、より具体的に文化、そしてその本質である象徴の作用に踏み込んで理解することができるのかも知れない、ということであろう。尤も、本稿はまだ仮設的、実験的な試みに過ぎない。より具体的な方法や分析については、今後、別稿にて論じることとして、ひとまずこの考察を閉じることとしたい。

## 注

- 1 この点については、例えば、廣松渉『「近代の超克」論：昭和思想史への一視角』講談社、1989年等を参照のこと。
- 2 今枝法之『溶解する近代：社会理論とポストモダニゼーション』世界思想社、2000年、佐伯啓思『現代社会論：市場社会のイデオロギー』講談社、1995年等。
- 3 Clifford Geertz, *The interpretation of cultures : selected essays*, New York : Basic Books, 1973、等のギアーツの著作を参照のこと。
- 4 前掲書、p.35以下。
- 5 本稿におけるゲルナーの理解については、拙稿「産業社会における分業と政治 - アーネスト・ゲルナーからの考察」『愛媛法学会雑誌』（愛媛大学法学会）第20巻第2号を参照のこと。また、*Plough, Sword, and Book : The*

- Structure of Human History*, University of Chicago Press, 1990他のアーネスト・ゲルナーの著作を参照のこと。
- 6 例えば、『戦争と資本主義』論創社, 1996年をはじめとするヴェルナー・ゾンバルトの一連の著作を参照のこと。また、Immanuel Wallerstein, *Modern World System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-1750*, Academic Press, 1980。
- 7 朝鮮王朝のウェスタン・インパクトに対する対応は正にその典型的なものであった。拙稿「『高宗』から見た韓国併合 - 韓国近代史に位置づける」*The Journal of Pacific Asia* Vol. 9、2003、等を参照のこと。
- 8 嶺山政道編『トインビー』中央公論社, 1979年, 416ページ以下。
- 9 経済分野における同様の見解としては、I. ウォーラスティンの議論が代表的なものである。
- 10 尤もこのように言ったからといって逆に近代社会における「知識」が、前近代社会における「真理」と全く異なるということの意味はしない。近代社会においても社会は一定の知識に対する「信頼」の上に成り立っている。その意味では、近代社会と前近代社会の差は程度の差 - 但しその大きさの違いは無視することができない - であるということができるのかも知れない。佐伯前掲書、27ページ以下。
- 11 近代社会におけるこのような特質を異なる観点から示唆するものとして、例えば、次の著作が挙げられるかもしれない。シュムペーター『経済発展の理論：企業者利潤・資本・信用・利子および景気回転に関する一研究』塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳、岩波書店、1977年。
- 12 例えば、通貨危機のような一見明らかな状況においてさえ、各国はぎりぎりまでそれが致命的なものであるか否かを認識することが難しかった。
- 13 国宗浩三編著『アジア通貨危機：その原因と対応の問題点』日本貿易振興会アジア経済研究所、2000年。
- 14 例えば、*The interpretation of cultures*他のギアーツの一連の著作を参照のこと。
- 15 象徴論については、ギアーツの著作に加えて、ヴィクター・ターナー『象徴と社会』梶原景昭訳、紀伊國屋書店、1981年をも参照されたい。
- 16 例えば、*The interpretation of cultures*, 193ページ以下。
- 17 この様な外界からの刺激を処理する為の文化システムのある部分を、例えば、平野健一郎は「フィルター」と呼んでいる。平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年、62ページ以下。
- 18 本稿における日本のウェスタン・インパクト時の思想的対応については、松本三之介編『近代思想の萌芽』筑摩書房、1966年、佐藤誠三郎「西欧の衝撃への対応」篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導』、東京大学出版会、1965年、等。
- 19 堀川哲男『中国近代の政治と社会』法律文化社、1981年、27ページ以下。
- 20 一連の「近代の超克」を巡る議論を参照のこと。前傾廣松、及び、知的協力会編『近代の超克』創元社、1943年。
- 21 例えば新しいものとして、古関彰一『「平和国家」日本の再検討』岩波書店、2002年。
- 22 高坂正堯の議論。『吉田茂：その背景と遺産』ティビーエス・ブリタニカ、1982年等を参照のこと。
- 23 この点については、拙稿「『高宗』から見た韓国併合」、拙著『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識：朝貢国から国民国家へ』ミネルヴァ書房、2000年、等。
- 24 拙著『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識』。
- 25 この点については、「97年末通貨危機と韓国ナショナリズム」現代東アジア政治研究班著『東アジアにおける政府と企業』関西大学法学

研究所, 2002年。

- 26 拙稿「民主化をいかに『説明』するか：韓国における民主主義を巡る論議への一考察」研究代表者・玉田芳史『東・東南アジア地域諸国の民主化過程に関する比較史的研究：地域研究と理論研究の架橋』平成一三～一四年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (1) 研究成果報告書、を参照のこと。

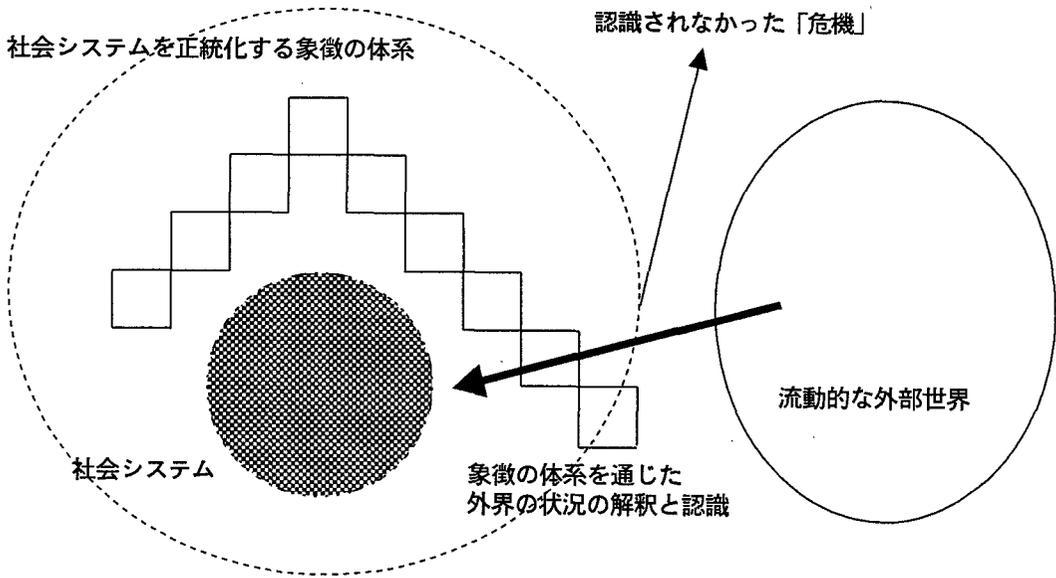


図1 システム変容前の「危機」の受容

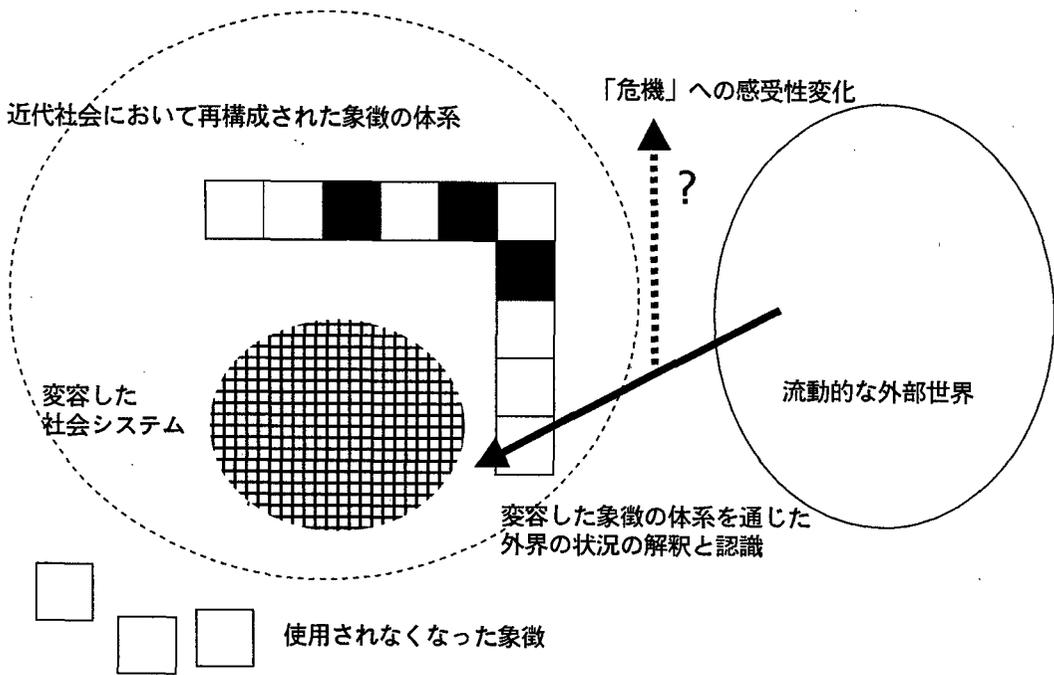


図2 システム変容後の「危機」の認識

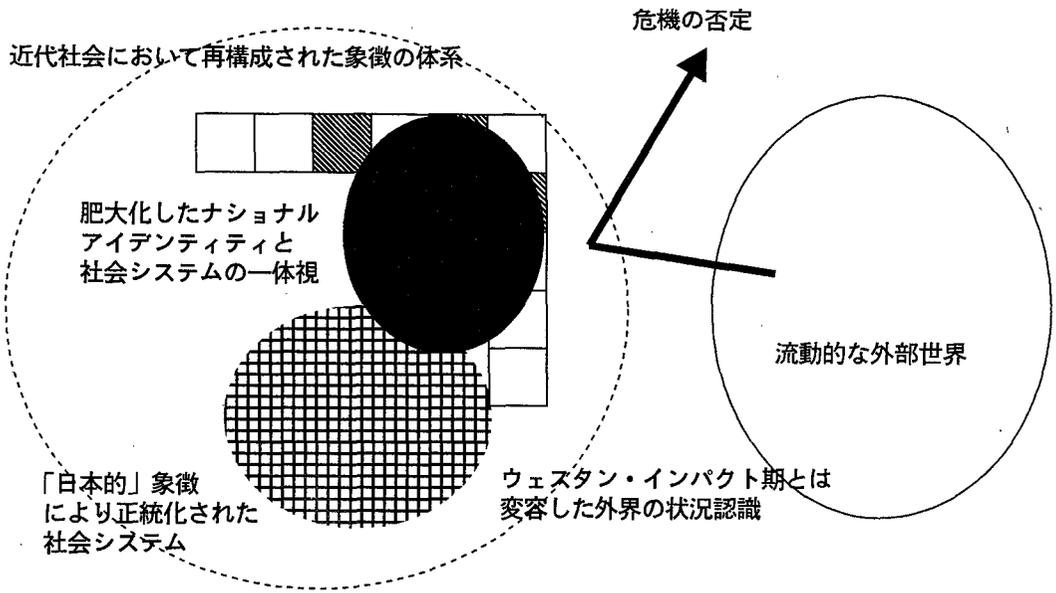


図3 日本

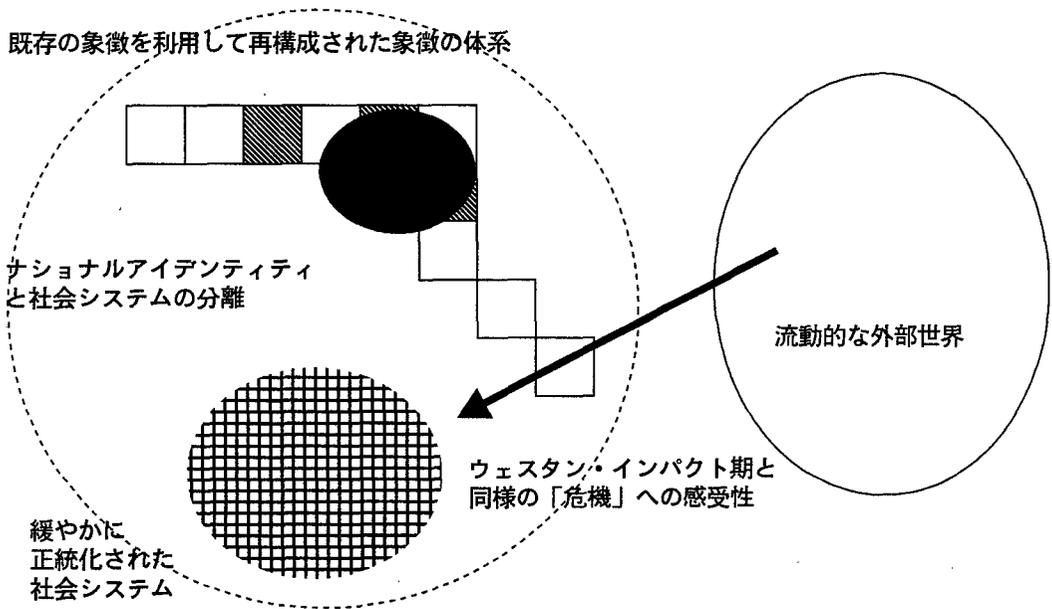


図4 韓国

## Cultural Adaptation in the Modern World : A Hypothetical Study

KIMURA Kan \*

### Abstract

This is a hypothetical study on cultural adaptations of societies in the modern world. The intention of this study is to make it clear what kind of actual role cultures can play for modernization.

Except for the case of England, which became the first modernized nation in the world history, the experience of modernization were trials and errors to adapt themselves to the modern world for their survivals. In other words, for such nations, successful modernization means successful adaptation to the new world.

However, there is one hurdle for the nations to get over here. The modern world has no clear and fixed standard for the nations to follow. One of the most important characteristics of the modern world is fluidity of the society, as once Ernest Gellner mentioned. In the modern world, even ideologies or our understandings on our society are also rapidly changing.

Here cultures must play two roles together. First, they must offer 'chains of symbols' to the nations, by which the nations can effectively read their 'crises' in the modern world. Culture also must offer other 'chains of symbols' to the nations to legitimate new systems.

Experiences of Japan and South Korea give us lessons how actually these cultural adaptations processes are important in the modern world. One of the most important lessons we can draw from the experiences of these two nations is legitimation of the new systems. In Japan, people tends to use nationalistic symbols to legitimate their social systems. In this situation, it is

---

\* Associate Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

natural for the people to be afraid that changing their social systems and breaking the chains of symbols which have legitimated the systems may threaten their national identity. In contrast, Korean social systems are not legitimated by such 'national' symbols. We may find one reason why Korea could dramatically change their systems after the financial crisis in 1997.